の再検討も必要であると思われる。それらもここでとりあげた例と共通する面があると考えられるからである。

今回の分析では種々の細かい特徴については述べなかった。これらは，ここであげた意義特徴に内包される，または意義特徴相互の関係の中で説明されると考えたからである。このような考え方がなお説得力をもつためには，他の語の分析が行なわれ，各特徴が詳細に検討される必要があろう。

言語経歴：1955年3月　兵庫県西脇市生　0歳～18歳西脇市　18歳～22歳　静岡市　22歳～　東京都大田区

ひねる・ねじる

岩　崎　正　枝

1. はじめに

「ひねる」「ねじる」は国立国語研究所1964の「2.157変形」に含まれる語である。ここには他に「まがる」「ゆがむ」等の語もあるが，「ひねる」と「ねじる」はより類義関係にある語のようである。ここではこの二語をとりあげ，その差異をできるだけ明確にしていく。

はじめに，「ひねる」「ねじる」の共通点として，次の三点をあげておこう。（柴田1976参照）

(i) 指先，手，あるいはその延長と考えられるものをつかって

(ii) ある対象物を

(iii) 回転させる

ここで，「ある対象物」の「回転」という観点は，分析を進めていく上で注目すべき点であろう。

2. 分析

2.1. 回転運動

「ひねる」「ねじる」はどちらも回転運動である。『角川国語中辞典』には次のような記述がある。

> 「ひねる」は「ねじる」に似た意味をもつが，「ねじる」の本意は両端を左右反対向きに回転させようとする物理的運動をいい，「ひねる」は一端だけを回転させ，他の一端が固定しているか，回転の中心となるような物理的運動をいう。

これは「ひねる」「ねじる」の意味特徴の差を十分に表わしているだろうか。

(1) バナナを　ひねって　取る。

(2) バナナを　ねじって　取る。

(3) 腕を　ひねる。

(4) 腕を　ねじる。

この例では，それぞれ固定された一端を想定できる。

(5) 上体を　ひねる。

(6) 上体を　ねじる。

この例も，下半身を動かさずに上半身だけを動かすことをいうのであり，つまり「一端を固定して」という特徴は「ねじる」にもあてはまるのである。では一方の，「左右反対向きに」という特徴はどうであろうか。

(7) 紙を　ひねる。

(8) 紙を　ねじる。

この例では，普通，紙の両端を持って左右反対向きにまわす運動が考えられるのである。これは「ねじる」だけの特徴とはいえない。したがって，回転運動に二つのしかたがみられるということであり，これが，「ねじる」「ひねる」を区別する特徴であるとすることはできない。

「ひねる」「ねじる」については，では次のような記述もある。

> 「ひねる」「ねじる」「よじる」などでは一部分が回転するだけでほかの部分は回転しない。（国立国語研究所1972 p.94）

これは「ひねる」「ねじる」「よじる」を「まわす」との比較でとらえた見解であるが，部分か全体かという問題は相対的な問題であり，「ひねる」「ねじる」を一部分の回転とするのは正確でない。このことは，前にあげた回転運動のしかたに関連してあらわれてくると考えられる。つまり，回転の動きは(1)～(6)の場合は部分，(7)～(8)の場合は全体ととらえられるのだろう。しかし，動作の結果として起こる変形という面ではこの区別もあやふやなものとなる。(1)～(6)のように，一端を固定した場合でも対象全体が変形していると感じられることもある。

回転運動における「ひねる」「ねじる」の差異は，次のような例ではどうであろうか。

(9)× 手ぬぐいを　ひねって　はちまきにする。
(10)　手ぬぐいを　ねじって　はちまきにする。
(11)× 大きな布を　ひねって　ひもをつくる。
(12)　大きな布を　ねじって　ひもをつくる。

これらの例で，対象物「手ぬぐい・大きな布」はそれぞれ「ひねる」こともできるが，(9)，(11)の状況を想定するといえなくなる。上の例文では，手ぬぐいや布はぐるぐると何回転もさせねばならず，このような場合には「ねじる」のみがつかわれるのである。新村1976によると，「ねじ」は古語「ねづ」の連用形から転じたという。「ねじ」も何回も回転させながらはめこんでゆくものである。

(13)　びんのふたを　ひねって　あけた。
(14)　びんのふたを　ねじって　あけた。

(13)ではひとひねりしてふたがあけられるのに対し，(14)ではぐるぐる回転させてふたがあけられる。「ひねる」が一回転以下なのに対して，「ねじる」には回転数の制限がない。どちらかといえば，比較的回転数の多い場合に用いられる。「ひとひねり」「ねじりはちまき」等の語も「ひねる」と「ねじる」の回転数の差を示しているといえる。

(15)　水道の蛇口を　ひねる。
(16)× 水道の蛇口を　ねじる。
(17)　裸電球のスイッチを　ひねる。
(18)× 裸電球のスイッチを　ねじる。
(19)　テレビのチャンネルを　ひねる。
(20)× テレビのチャンネルを　ねじる。
(21)　コックを　ひねると　湯が出る。
(22)× コックを　ねじると　湯が出る。
(23)　ガスの元栓を　ひねる。
(24)× ガスの元栓を　ねじる。
(25)　ドアのノブを　ひねる。
(26)× ドアのノブを　ねじる。

これらの例では，すべて，「ひねる」をつかう。「水道の蛇口・スイッチ・チャンネル・コック・元栓・ノブ」は，みな構造上回転可能なもので，原則として一回転以下で用は足りる。これらの例で「ねじる」がつかわれないのをみると，「ねじる」に回転数の制限がないとはいうものの，基本的には，数回転させるという特徴をもつことがわかる。

2.2.　回転運動に伴う特徴

以上の例文から人体に関していうと「ひねる」「ねじる」は，「指・手・腕・足・腰」など，すべて共通してつかわれる。

人間の体は，本来一回転以下しか動かすことはできないものであるが，「ねじる」の回転数に制限がないということで，一回転以下の場合も許容されていると考えられる。

(27)　腕を　ひねられて　骨が折れた。
(28)　腕を　ねじられて　骨が折れた。
(29)　足を　ひねった。
(30)　足を　ねじった。
(31)　腰を　ひねった。
(32)　腰を　ねじった。

「ねじる」については，

> ネジルには，さらに痕跡を残すという付随的な特徴があることをつけ加えなければならない。(柴田1976p.134)

とされているが，それは「ひねる」でもいえる。ただ，「ねじる」の方が回転数が多いので，物体が破壊されるぎりぎりの限界に近づく傾向がある。そのため，破壊の痕跡を伴うことが多いのだろう。「ねじる」と複合語をつくる「～折る」「～切る」「～取る」「～曲げる」「～あける」などは，すべて，対象物を何度も回転させて破壊することを示している。一方，「ひねる」は，「～だす」「～まわす」「～殺す」「～たおす」「～つぶす」などと複合語をつくる。「～殺す」「～たおす」「～つぶす」対象物の破壊を意図するものではあるが，比較的瞬時の動作という印象が強い。

3.　派生的用法

「ひねる」と「ねじる」は派生的用法においては次のように用いられる。

(33)　頭を　ひねる。
(34)　首を　ひねる。
(35)　君なんかかるく　ひねれるさ。
(36)　鶏を　ひねる。
(37)　この問題はすこし　ひねってある。
(38)　俳句のひとつも　ひねってみるか。
(39)　ピアノの音がうるさいと隣の家へ　ねじりこむ。
(40)　苦情を　ねじりいれる。

言語経歴：1956年8月，神奈川県厚木市に生まれ，現在に至る。